

全国治水砂防協会の時代

河井弥八は昭和16年(1941年)頃から、林業関係や全国の治水砂防関係に関心を寄せていた。この問題に早くから取り組んでいた人に、赤木正雄がいた。治水砂防の治山事業は国の根幹事業であるにも関わらず、その活動に、必ずしも国会議員の理解を得るまでには至らなかった。貴族院議員であった河井弥八は赤木正雄の治水砂防の活動に共感して、その顧問を引き受け最大の理解者になっていった。

戦前戦後の大量の伐採により森林は至る所で荒廃していた。こうした実情調査のため、全国各地を飛び回って数知れぬほどの実地踏査を行った。残された遺品の中には、日本各地の地形図が沢山あり、このことを窺い知ることができる。

荒廃した山野は、大雨・台風のたびに大きな被害をもたらす。被災地には、たびたび足を運び、実状を視察した。災害は天災にあらずして人災にあるという思いを強く持つようになった。災害の禍根が砂防事業の欠如であることを身をもって感じ、治水砂防の重要性を再認識して、その政策を県や政府に強く働きかけた。

河井弥八の現地調査や視察の際の出立ちは、上はハンチング帽に雨用のコート、下は脚絆姿と地下足袋という姿で、どこかの村長さんか山役人の如くのこだわりのない扮装であったという。

60歳後半から70歳代の体力的にもきつい年令にも関わらず、精力的な活動をした。昭和28年(1953年)には、「国会議員としての私の仕事は、食糧の自給実現と治山治水の完遂である。」と言っている。荒廃した林野や災害被害地の復興を願って、国土の保全、治水砂防問題に深く関わっていった河井弥八は、老齢をいとわず事あるごとに災害地に赴き、この問題と向き合った。



砂防工事現場視察



山口県災害地視察